

立田川と云ふ相撲と間違へられた事がありま
す」とある。現行全集では中学校・高等学
校・大学在学中には、柳川隆之介以外に別号
を用いた例は見当たらない。芥川が別号を盛ん
に用いたのは、大学卒業の後である。

まず、大学を卒業した翌月の大正五年八月
九日付の書簡に、残夜水明楼主人というのが
ある。これは、杜甫の「四更山吐月、残夜
水明楼」からとったものであろう。

翌六年五月一日、論文（何をさすか不明）
を書いた後と云うから、宇治紫川の号で一世
一代の作という一中節の新曲「恋路の八景」
を書いて秦豊吉に送っている。宇治紫川の号
は、芥川の養家の父母や伯母が習っていた一
中節の師匠宇治紫山をもじつたものであろ
う。芥川は、この「恋路の八景」を「淡しく
して余情ありまことに江戸趣味の極まれる」
ものと自画自讀している。

椒園道人、これは大正六年十一月二十五日
付の書簡にみえている。「後年の書きほごし
原稿『白獸』の昌頭によれば、『嘗、椒園と
云ふ号をつけた事がある。椒園とは、八大伝
によると『黙するを好む』龍だと云ふ。そこ
でこの号を得意になって、椒園居士とか何と

かつけた」事があるとなっている」が、現行
全集では椒園を冠した号はこの書簡以外に見
当らない（葛巻義敏「芥川龍之介ノート」『椒
園志異』解説）。

大正六年頃の作品「Lieish Scarlet」の訳
者として羽賀宇阿というのがある。羽賀宇阿
は、逆に読めばアクタガハという洒落で、九
年十一月一日付の書簡にも羽賀宇阿入道と署
名したものがあつた。また、これに類するもの
に、十三年頃の書簡に利字乃須計と署名した
ものがある。なお、吉田精一氏は「Lieish
Scarlet」の原作者として記されてるArthur
Halliwell Donovanも、外国人らしく作っ
た芥川のペンネームではないか、とされてい
る（筑摩版全集 第六巻註）。

大正八年十月二十一日付、佐々木茂索宛の
書簡に「号を何とかつけないかね手紙をかく
とき無風流でかけないから澄心亭主人とか緑
梅洞々主とか僕の場合の号を進上しよう
と」と書いている。佐々木茂索によれば、芥
川は「大正八年乃至十年頃までは澄心亭、或
ひは緑梅洞、或ひは了中庵等を我鬼と共に用
ひてゐた」といわれているが、現行全集では
用いられている例はない（佐々木茂索「無題」

てこの集より早く夜来花庵生（大九・七・十
・八書簡五通）がある。また、大正十年二月
十九日付の書簡に夜来洞主と署名したものも
ある。

三拙漁人（大九・二十二書）、三拙生（大
九・十一・十六書）は、三絶をもじつたもの
であらう。即ち、三絶とは三種の技芸（画・
詩・字）の卓絶せるものをいう。

芥川が「秋」を書いていた頃、大正九年十
二月三日付の書簡に「この頃人に四王呉憚の
画集を借りました南田が一番好いやうです」
と書いている。この「南田」にヒントを得た
と思われる号に雲田がある。芥川は「大分諸
君子にひやかされ」ながら雲田という号をつ
け、九年十二月六日、十日、二十九日付の書
簡に用いたが、小沢碧童に「雲田の号は嫌味」
があるといわれて、「もう少し考へた上につけ
る事にしませう」といっていたが、以号この
号は止してしまつた。同じ頃、雲田を洒落た
雲田屋我鬼兵衛、小函嶺隠士雲田というのが
ある。小函嶺の「函嶺」は、いうまでもなく箱
根を中国風によんだ語であるが、これは芥川
の住んでいた田端の家の近所であつた切通し
の路を通つた男が「箱根のやうだね此処は」

と云つたのを聞いて、「ボク貧乏なりと雖も
名勝負根の如きものの側に住んでりや光栄」
と、早速「小函嶺隠士雲田」と洒落たもので
ある。

また同じ頃、小沢碧童が最仲という号をつ
けたのを知つた芥川は、「日本雅号を一つつ
けたいと思つていろいろ考へて」いた。芥川
によれば「雅号に二種あり一は支那直輪一は
日本特製でありますつまり漱石は前者最仲は
後者」で、「光悦の子の空中、小堀遠州の宗
中、なぞ中の字の号が好いと思つても最仲の
向うを張る程のは一つも遭遇しない」のだ
と。そこで、中のつく号をいろいろ考えた挙
句、「且中としようかと思つたが未定、中の
字のつく号は悪くすると男芸者じみるのでむ
づかしい 昌中 玄中 童中 呆中 寂中
景中 素中 了中、皆落第 昌中はどうかと
思つたがこれも亦未定田中と云ふのを考へた
らタナカだつたので困つた」。「姓名判断によ
ると了中と云ふ号が好いさうですが何だか男
芸者じみる為ためらつてゐます」、「田中名号
ナリ田中ニショウ」と云つていた。そして、
大正十年一月三十、三十一日、小穴隆一、小
沢碧童、遠藤古原草等と千葉県布佐で遊んだ

改造 昭二・九。

寿陵余子、大正九年一月から五月にかけて
發表した「骨董羹」に用いている。芥川は、
この号の由来を「寿陵に余子あり歩を邯鄲に
学ぶ未邯鄲の歩ならざるに寿陵の歩を忘る即
蛇行匍匐して帰るとか何とか云文章が韓非
子にあるから拵へた号です余子は唯青年と云
ふ意味でせう僕自身西洋を學んで成らずその
内に東洋を忘れてゐる所が邯鄲寿陵両所の歩
き方を學び損なつた青年に似てゐると思つた
からです」と書いている（大正九・三・三十
一書）。

桃実居士、大正九年四月、芥川は或女性に
宛てた手紙を取違えて岡栄一郎に送つたこと
があつた。岡が、その取違えられた手紙を返
送したところ、芥川は返事代りに「桃煙の中
や寛の水洩るゝ」の句と、「手紙の中が違つ
てゐやうとは思はなかつた閉口の余句を作
る」という言訳とを表裏に認めて送つた。桃
実居士は、その言訳の方に署名したものであ
る（岡栄一郎「芥川の短冊」文芸春秋 昭二
十九・三）。

芥川の第五短篇集に「夜来の花」（新潮社
大十二・三）があるが、これに因んだ号とし

時、四人で合作した「布佐行絵巻」に芥川は
了中、小穴が田中、小沢が最中、遠藤が清中
と各々中のつく号を用いている。書簡では未
生子且中、了中庵の二つを用いているが、中
のつく号はこれで立消えとなつた。もつと
も、この時から一年半を経た大正十一年八月
九日付書簡に風中龜生というのがみえてい
る。

以上の他、作品に用いたものに大正十二年
三月發表「八宝飯」の一部分に瑯琊山客、十
二年六月發表「思ふまゝ」に「浅香三四郎、十
四年四月發表「念仁波念遠入帖」の大鵬生等
がある。また、書簡の署名には居所田端に因
んだ田端奉行（大十一・八・二十六）田端之
河童（九・十・二十一）たばたやすみえ（十
四・五・一）、柚の本の鳥麻呂（十・十・十）
椎本石麻呂（十一・三・十九・十一・三・二
十六）ニハタツミの辰マロ（十三・五・一）蔓
性神経衰弱ヲ洒落レテ号トシタルモノト心得
ラルベシ」と註のついた曼青（十四・五・二
十九、昭二・七・八）同じく蔓性胃腸病の悩
みを洒落に維兆曼青居士（十五・一・二十七）、
隣家の香取秀真に宛てた堂奈利須無子（十三・
四・二十）、芥川が可愛がっていた甥の葛巻

義敏に宛てた書簡にはリウ大人（十三・八）
（江良）
 江良に叔父十三・八・二十三）龍殿さま（大
 十五）等があり、長男比呂志が生まれた時、
 既に二人の子の父となつていた恒藤恭に宛て
 た書簡に一人の子の父（九・四・二十七）、
 藤沢清造宛に「権現様まある」として八幡
 （十一・十・十四）、風貌による愛称へチマ
 （昭二・五・二十四）等がある。

しかし、大正十五年九月十六日付の書簡に澄と署名して以後、芥川は書簡にもあまり別名を用いなくなり、芥川龍之介・芥川・龍之介と署名するようになった。十五年九月十六日以後では、昭和二年五月十七日付の澄、二日以後の龍・ヘチマ、自殺の約二週間前に曼青と署名したものを数えるのみである。

芥川が別名を用いなくなったことを、死の決意と結びつけてみるのはやゝ飛躍した見方であるが、「ごまかし」から「真実」を語ろうとする態度に苦しみ、進んでいたといわれる晩年の芥川の一面を示している、といえるのではなからうか。

文中*印を付したものは、筑摩版全集索引に収められていないものである。

随
想

清水泰先生につながる

思
い
出

佐々木曠一

十年一昔と云うが三十余年の昔、禿頭の老漢である私も紅顔の一年少学徒であつた頃、先生は我々の為に「堤中納言物語」を講ぜられた。「はいずみ」「虫めづる姫君」「逢坂越えぬごん中納言」などなど、興味深く講ぜられるに従つて我々は引入れられて行つた。その頃の、あのものやわらかな、温厚そのものと云つたような、それでいて、しんは飽くまで強じんな先生の講義振りが眼の前に浮ぶようである。

卒業後も私は同じ学園の中学校・高等学校に一国語教師として奉転し、公私共に色々御指導を受けた次第である。

教師生活に入つて二三年目から文学科の卒業学年の学生が教育実習の為に清水先生につれられてよく北大路の中学校に授業参観にやつて来た。卒業生と云つても二部の学生で、

受贈誌(三四・四一九)

[illegible]

1110

人文論究	十九号	函館道学芸大会 北海文学会
ビブリア	十四号	天理圖書館
法文論叢	十一号	熊本大学法文学会
語文	二十二号	国文学研究室 大阪大学
日本文学誌要	三十一号	法政大学国文学会 東京大学文学部
人文学報	十九号	聖心女子大学
聖心女子大学 文学部	十二集	駒沢大学
駒沢大学 文学部	十七号	国学院大学
国学院雑誌	四十七号	国学院大学
金沢大学 文学部	文学篇六	金沢大学法文学部
法政大学 文学部	七号別刷	大阪学芸大学
大阪大学 文学部	八卷一号	奈良学芸大学
大文学部 文学部	第九号	島根大学
島根大学 文学部	第九号	日本文学研究所 大阪大学
研究紀要	創刊号	通信短期大学
研究論集	創刊号	演劇研究会
演劇研究会 資料目録	近松の研究 と資料	同志社大学 文学部
資料目録	十六ノ二	同志社大学 文学部
人文科学研究	十二号	明文学部 文学部
善本写真集	十三十四	天理図書館
層雲	五十一十	層雲社
新京都文学	十三	新京都文学会
本朝水滸伝 物語		静嘉堂文庫
由良物語 日本文学史論		島本恵也
古代書目 家藏鵬外書目		菰池佐一郎
(未定稿)		

多くは小学校の教員である。現場でたたき上げた教育畑の猛者連ばかりだった。それが授業参観が終っていざ批判会と云うことになる、うるさい小姑のような皮肉な批評を、ちくりちくりと飛ばしてくる。こちらは経験わずかに二三年だから心細いことである。然し

とにかく三年たつてからは、毎年の批評会をこぎぬ
てにかく曲りなりにも毎年の批評会をこぎぬ
けている中に二部の学生が段々少くなつて今
日のような教育実習の制度が出来上つたので
ある。

その頃の小学校の教師には所謂師範教育で固つたような、こちこちの型にはまつた、師範臭のぷんぷんするのがずい分居たものだ。そんな連中がある時例の授業参観の批評会の席上高遠な教育理論を弁じた後奇妙な発言をしたものである。

「古人のソウカス（糟粕）をなめる」

「ツマツジ（つじつま）の合わぬ話云々」
私は何も些々たる片言隻句を捕えてあげつら
う気持は少しもない。然し百万言の長広舌よ
りも、大上段の教育理論よりも、たった一つ

の常識の方が大事な場合があり得ると云うことが言いたいのである。子供にとって大切なのは、百万言の教育理論でも、懸河の弁でも

ない。基礎的な、常識的な、本源的なもの、これが欠けて居ては滔々たる熱弁も何するものぞ、子供にとっては仏造って魂入れずである。師範教育に何か一本足りないものがあつたように感じられるのである。清水先生も恐らく苦笑して居られた事と思うのである。

教育実習にはその他の色々の思い出がある。ある時、実習生の授業を取り上げて批判検討した事があった。(本来ならばこれが本当の教育実習の姿なのだが古い時代にはこれが逆の形で行われていたのだ)私は此の授業を十分余りしかのぞいて居らなかった。然し批評会の席上では十分間の所見でもこれだけの角度からこれだけの批評が出来るものだとかかりに、いささか得意になりながら一席升じたものである。清水先生は黙ってこれを聞いて居られたが、「批評と云うものは最後迄聞いてからするものです」と一言ぴしりと言はれた。手痛い批判だった。今だに忘れられない。温厚の君子人たる清水先生にもきびしいのがあることの片鱗である。

終戦後間もなくの頃、先生は田中重太郎氏と共に平安文学会を興して居られた。戦中戦後の匆忙の間私は私の生活を追うのに精一杯

だった。人のことなど振向く余裕もなく、がむしやに自分の生活を守って来た。そんな訳で先生と私との間には何のかゝりもないかの如くであった。そんなある日、先生は田中氏を通じて岩波国語読本の教授参考書を借りたと言って来られた。幸い持合せて居た二三冊をお借した事だった。何でも新しい教科書を編纂されるとか云う話であった。それきり忘れともなく忘れて一年ほど経ったある日、突然先生の来訪を受けた。自身で参考書を返しに見えたのである。先生の几帳面さに今さらながら感激し恐縮した次第である。教科書の方は或る事情で逐々出ず仕舞だったとか聞いた。

先生が学界で華かに活躍して居られるのを仄聞しながら十年一日の如く中学・高等学校で教鞭を執っている間に二十五年が経ってしまった。さしにも新陳代謝の劇しい高・中で久しく第一線に居た自分にも天人の五衰？が訪れる日が来た。同僚九人と共に配転されて大学の図書館に勤務する身となった。劇しいコンプレックスや自己の懺悔と闘いながら色とりどりの若人達の中に交って働きつつ、老醜の次第に露わな自分を省みる時、私の気

サンボウカン

大上 敬義

「きみ。サンボウカンを買ってきてくれませんか。」

法文学部に創設の文学科国文学科に入ってもなく、主任の清水先生からこう言われたの突差に、(大学教授が学生にサンボウカンを買いにやらせてどうするのだろう。研究室でも食べるツモリかな。それにしてもチョット変わってるな。)と思った。直感的には「カン」のひびきで食べ物ということはピンときたが、それがヨウカンの類かミカンの類か。第一、サンボウカンをばくは知らない。

「サンボウカン？ てなんですか。」と聞くと先生は困った風に、それでもにこやかに手まねをつけて。

「ほら、夏ミカンの一種で、甘いがあるでしょう。あれですよ。あれを五つ六つ。」と財布をお出しになる。

「そんなに沢山？」と、ぼくがオカネに驚くと先生は少し照れて、「少ないかな。みんな

持は悲劇的であった。絶望的でさえあった。

ある老先生は路上で出会った時、虚心に大学に來た事を報告し御挨拶しようとした私を避けるようにさえされた。逃げるようにパスに乗って行かれる先生の表情には明かに狼狽と固い拒非の氣持が読みとれた。私は落目になった者へ接近する事によって自己の保身に危険を感じての行為と老教授の行いを憶測しひがむ前に自分自身の中に内抱する弱点(それは極度のコンプレックスと自虐の果てに人を近づけさせない一種の妖気の如きもの)となつて私の身邊にまつわりついて離れないものに氣付いて慄然とした。

そんな暗い思いの出の日からでも早五年経つ。私は私のスランプを脱け出すために私なりの努力をした。友人や先輩の二三の方々からも温い援助を得てやっと立ち直りかけた或日のこと、勤務を終えて帰りがけ、同僚を待つて校庭のベンチに腰を下している自分につかつかと近寄って来られたのが清水先生であった。

「近頃はどうかですか。あちらに居た時と気分はちがいますか。」と云った意味の一言二言であったがそれがその時の私にとってじー

なで食べるには。」とおっしゃる。ぼくは見当違いにドギマギして尋ねた。

「みんなで食べるって？ 一体どうするんですか。」

「なあにね。ほんの気持だけのことだけど今夜はみんなの入学を祝って、歓迎会兼座談会でもやろうと思つてね。」と先生の方の顔が思いなしかいくらか赤い。

「そんならみんなに話しかけてみんなまで出しあつてやります。」と申し上げると、「勝手にいいだしてどうかと思うが、今夜のことはぼくの希望でいいでしたんだから、ささやかで悪いけど、ぼくが出しとくよ。それでよろしく。」とおっしゃるので使には出たが、ゆめにも思いがけなかったことだけに、みちみちも、感心したり感激したりした。

昭和十六年といえ、大東亜戦争が始まった年で、その年の春のことだからそろそろ物が店から姿を消すか、あつても少なく、高くなりかけていた時分である。

先生の喜捨で両手にいっぱいサンボウカンを抱きかかえて帰るとお茶を添えて会合が始まった。

ひとりひとりが自己紹介をして希望を述べ

一三三

んと胸に迫る力を持つて居た。私はその時先生の温い氣持は充分汲みとれてはいながら「住めば都ですわ」等と強がりめいた言葉をつぶやいて御別れた事を今さらながら申し訳なく思っている。

今年の四月であつたか、五月であつたか、先生が突然図書館に見えた。先生が定年になられた事の御挨拶に見えられたようなのでしばらく話して居る中にふと鞆の中に持合せていたのを思い出して、私の貧しいライフワーク「歌集いしづみ」を遅ればせながら差上げた次第であつた。

先生につながる思いの出は三十年間の学園の消長と関聯して未だ未だ尽きない。先生に教えられる所は多々あるが、然し私は私の道を歩くしか仕方がない。寂しくても、心細くても、ゴーイング・マイ・ウェイである。恐らく先生も同じ思いで居られることだろうと思ふのである。

る。ぼくは小説家になりたいといったら早速、

「学校だけはサボらないようにしなさいよ。」と先生が図星をされた。ぼくはいっぺんに舌がもつれ胸が詰まって座り込んでしまった。本当はサボル魂胆だったのが、先生のひとことで、(これはエライこっちゃ。)と思ひかけるようになり、思わず「ハイ」と子供みtainな返事をしてから、(サア大変と)先生を見ると例の半泣きみたいなやさしい顔でほほえんでおられる。ぼくは急に自信を失なつて登校しないと不安でしかたがなくなり、毎日、それも早い目に家を出ては大学の周辺を歩き廻った。サボロウとする氣持がわくと先生のひとことがこの時の突顔と共に浮かびあがつてくるのである。妙なことになったもののだが、おかげで食うや食わずの三文文士にはなり損ねた代りに、学校勤めをしていられるのにもこの時の耳学問が大いに役立つ結果となった。

卒業前から中学に奉職する際にも先生の御紹介にあずかった、不肖のぼくは一向御無沙汰失礼ばかりしてきてしまった。役員後、小泉先生のお口添えて当時の初音書房から処女

詩集「愁ひの実」を出してまでもなく、先生の方からお祝いのお言葉を頂いた。

「今日は市電の車中で貴君の詩集を読んでいる人を見かけてうれしく存じました。いい本ができましたね。本学からも一人ぐらいいは詩人が出てほしいと存じました。」とお便りに、ぼくは早速で先生に献本しなかった理由を見つけて恐縮する弱気を取り戻した。今度は勤め先の（学校だけはサボらないようにしなさいね。）といわれることが辛かったのである。それに今度は大学と違って、ぼくは時々学校をサボルだけでなく、二度も、案の定、学校をやめては京都で一度、東京で一度、放浪生活、居候生活を繰り返して、妻子を置き去りにする悪癖が一応納まったかと思うと、今の学校（県立奈良商工高校）に八年も落ち着いたものの、やっぱり時たま、気づい気ままのルンペン癖が出てきては周囲を困らせ果れされる台風が心から体を荒らして吹き抜ける始末である。

こんなものをお目にかけると先生にはいつまでも御心配の種になるばかりだが、不肖のぼくにはこれが精いっぱいのところである。今ぼくは国語の乙で堤中納言物語をやって

いる。先生の評釈をたよりに、うまくいけばいくで、グッと詰まれば詰まるで、一層先生がなつかしい。そしてサンボウカンの頃がなつかしい。それにしても思えば思うほど先生にあわす顔のないことばかりである。気ままがタタッて左眼の焦点はあわなくなり、毒舌の天罰で前歯を欠き、不惑を越したばかりにもかかわらずぼくは老いた。ぼくが老いると自分の気ままは棚に上げ、あつかましいウヌボレから自分を推して先生の頽齡を察するといふ無礼な暗算が働きかける。これは逆縁の凶兆であろう。願わくはそうあってほしい。いつまでも先生がお元氣であると安心して、ぼくの方がお先へ失礼したいと思われる。

「若い時分には、こう見えても血氣盛んで、これで随分ケンカもしたことがあります。」と講義のあいまに聞いた先生の想い出話が想い出になる。十八のものの昔の話。清水中納言物語のロマンスを開きのがしたことだけが、時代からといはいながら、今にして想えば千載に悔いが残る一大痛恨事である。朝日新聞の「生活のうた」がキツカケとなつて、ぼくは今、地元の大和タイムスに今年いっぱいこの予定で「くらしのうた」を書いて

いる。この連載が終ると単行本になる手筈だが、今度は地方紙という特殊事情は別として、日々の明け暮れに追われる一喜一憂を、小説家志望後日談報告代りに進んで御一読願いたいと甘えたくなる。

サンボウカンから始まった先生とのつながりは、ぼくにおいて、先生のお氣持を曇らせる結果となったが、ぼくにはあの、サンボウカンの淡い甘みが、無味乾燥の時代の甘露として、ともすればヒズミがちな暗い世相に押しひしがれてきた中でも、負けながら惜しみたいもののあわれの香気を放ってくれる。

清水先生の思い出

滝 典 通

烏兔勾々などという言葉が漸く実感となる年齢になった。清水先生の還暦祝いがつい此の間であつたと思うのに、早くも定年御退職のこと。私が先生に教えを受けた頃は、あの悪夢のような戦いの終盤であつた。先生はその頃文学部長をなさっていられ、後藤先生や

今や故き小泉先生と共に、はげしい食糧の中でもすれば失われ勝ちになる我々の学生の学問への情熱をもえ立たせて下さった。今でもはつきり眼に浮ぶのは、同窓の辻正一、森下幸男両君が応召した時、先生が涙をたたえて激励なさった恩顔である。戦いが熾烈を極めた頃、私は勤務校の児童に付添って、香川県綾歌郡の白峯御陵の麓松山村に集団疎開し、そこで卒業論文を書いた。その頃先生と後藤先生の御二人が白峯に一度行くから案内せよとのことで、心待ちに楽しんでいたが、それも相次ぐ空襲で実現されずにしまった。今でも残念に思っている。

私自身は卒業後京都に帰り健文社に勤めて大学の研究科に籍を置き、戸田茂雄の論文を書いたりしていたので、先生に引きつづいて種々御指導を仰いだ。田中野神町の御宅へも何回か御邪魔した。乏しい戦後の食糧事情の中で、配給のビールの御馳走になったりした。その後私は家の都合で郷里に帰り高等学校に奉職し、以来十数年貧乏暇なしで先生に御拝眉の機を得ない。その間、小泉先生は追放で去られ、後藤先生も又大阪学芸大に転ぜられた。文字通り立命館学部の支柱となつて

後進の持導に生涯を捧げられた先生が、いよいよ定年御退職なさることは我々にとって誠に感慨無量である。私は先生がいつまでも御健康で、堤中納言物語などの特色ある御研究に裕々御余生を楽しまれることをお祈りして止まない。同時に、かつて果さなかった白峯行に是非機を見て、後藤先生と御一緒に誘い致し度いと念願している。

清水泰先生のこと

妹 尾 権

この春、恩師清水泰先生が立命を去られた時、私には一入感慨深いものがあつた。

戦後、私の郷里に大学が新設され、この文学部主任教授として赴任されるといふ新聞を読んで、先生のお宅へ伺つてその話をした時、先生は立命を決して去らないという御意志の堅きに、いかに立命を愛されていられるかを思い知らされたのである。

思えば、その時の御意志のままに、三十四年の長い年月をひたすら立命のために尽くさ

れながら、しかも、その業績は、ひとえに立命内にとどまることなく、日本の国文学会に大きく寄与された、偉大なわれらの清水先生を、母校立命から失うことは、何としても残り惜しいことであつた。

考えてみれば、卒業生にとって学校とはおかしなところで、母校という感じだけあつても、年が経つに従い恩師が去り、校舎が変わり、そこに誰一人知らぬ者ばかりとなれば、現実にはやはり異郷の感はまぬかれない。私にとつて、母校立命は清水先生と共にあつた。身勝手な言い分ながら先生のいられない立命は、考えられないと言つても過言ではない。その清水先生が立命を去られたのである。

国文学界における堤中納言物語の権威者としての先生は、私の言を俟つまでもなく、余りに著名であらう。

先生のすぐれた識見は、この堤中納言が平安時代から鎌倉時代にかけての文学作品、源氏・枕と共にすぐれた作品として挙げたい旨「詳解」に書いておられる。また、王朝の文学は、結構の大であり、行文の優雅典麗であり、構想の奇抜なものなかにあつて、こ

の堤中納言物語は、それぞれ固有の光沢色彩を放つ宝石の、宝石筥にたとえられている。特に「虫めづる姫君」については、その評釈の中で、人間はやもすると、時代というきずなに自分がめめられ、流されようとする。その中であって、人間本来の姿を持ちこたえ、伸ばそうとする者に、大きな拍手を送っていただけることを読みとらずにはいられない。

このことは、古典を学ぶ者の大切な心のあり方であり、立場であらう。古典は歴史学者の史実の資料供給源として、あるいは用語や習慣の知的収獲のみに終らず、それが現代のわれわれに新しい意義と新しい問題を提供してくれるゆえに価値あるものとしたら、この堤中納言物語が、王朝文学の最たるものであることも不思議はないのではないか。そこに着目され、人間本来の精神に触れようとされた先生の偉大さに、私は頭を下げる以外にないなのである。東洋的・日本的臭気を抜き取って、世界の文学と肩を並べられる作品も、また、この作品であるという言い過ぎであらうか。

先生は温厚な方であった。常に平静に自己

を保ち、大声で学生を叱咤したり、取り乱されることの決してない。穏かな方であった。学者としての実力と、人間としての最高の品格を兼ね備えられた立派な美しい先生であった。

時に先生のお宅を伺って、頭のめぐりのよくない私が、勝手な気焰をあげ、つまらぬ駄弁を弄しても、先生は御自分の持論を無理に押しつけようとなさるぬばかりか、少しの軽侮の様子も見られず、あれかこれかと親が子に對する、あの無報酬の作業と同様に、適当にほめ、適当たしなめながら、ゆっくりと子の成長を見るように、研究の手がかりを示してくださったのである。にもかかわらず不肖の教え子は一向に先生の御厚意に応えようとせず、遂に郷里で、平々凡々の田舎教師になり下ってしまった。

しかし、先生に教えを受けることによつて、先生の常に人間としての真実、学問に對する崇高な情熱間近に知り得て、その僅かたりともわが身となし得たことは、私の終生忘れることのできない誇りであり、倖せであった。

幸い先生には御家族に恵まれ、三人のお子

様も、それぞれ御自分の道に御精勵御活躍のことであり、後顧の憂いなき先生の、ますます御自愛くだされ、学問の道を私たちのために拓かれくださる同時に、不肖の教え子のよき父、よき師として一層の叱正と御教導をお願い申し上げるものである。

ひぐらしのこえ

大伴 寿 男

清水先生が御退職になることを聞いたのは去る六月だった。

大学を卒業してから既に五年、その間に年賀状を唯一の便りとしてしまつて、私の筆不精をいつもながらと申訳けなく思っている。先生の御退職により国文科も一そう寂しくなることであらう。

思いを返せば六年前の夏、卒業論文に古今集を選んだ関係上、田中にある先生のお宅へよく御指導を仰ぎに行つた。日盛りの京の街もようやく暮れようとしていると、百万辺あたりの寺院の森にひぐらしの声を耳にした

がら帰途についたのも一度ならずあった事を記憶している。

卒業後は職を持つ身となり、何一つ研究もできず日々の多忙をのみかこっている状態である。切角先生に平安文学の手ほどきをしていただきながら、これといった事もできず申し訳けなく思っている。

はからずも、今、先生御退職の記念号に何か書けといわれ、浅学にしてまとまった論文も書けず、いつも考えている私の郷土と平安時代の和歌などを思いつくまゝに書いてみたと思う。

× × ×
夏休みに入り、ひぐらしの声が盛んに聞かれるようになった。

私の郷土の山麓に「大伴神社」という社がある。祭神は平安の昔の歌人、大伴黒主である。人も知る、紀貫之に古今集序文で「そのさまいやし。いはばたきおへる山人の花のかげにやすめるが如し」と評された、六歌仙の一人である。

私は少年の頃、この社の森へひぐらしを取りに入った。かぶと虫も多くいたので大へんたのしみであった。青年の頃には、感傷的な

感情も手伝つて、よくこの森に寝ころんでいろいろと想像し、希望を胸にしたのだった。

村人はこの社を「明神さん」と呼んでいた。「大伴神社」がこの土地にあることに一体どんな原因があるのだろうかと疑問を抱いていたのも少年の頃だった。

後年大学で平安文学をよむ中に、無名抄の中に「長等山の北の方の山麓に大伴黒主を祀る祠がある」と詳しいことはないが、ただそれだけ記してあったのを読み、明神さんも随分古くからあるものだ、と、少年の頃の興味をまず満足させたことだった。

しかし、黒主と「志賀」にはどんな関係があるのか詳しいことがわからなかった。が、過日近くの図書館で「ながらのさくら」という本を手にし、見ると「明治三十六年四月八日大伴黒主九百五十年に相当するを以て歌会を行ふ云々」兼題「故郷花」で三十六歌仙に因んでか、三十六首が詠進されている。その末尾に

右大伴四位大友黒主

天曆七年癸丑十一月初酉滅、六十八才従大路二丁有余西号前山有小谷其所江葬と著されている。

また、同書記載の「大伴黒主神社一代」に大伴黒主近江人也
天台座主記作者部類大伴作の故大友郷在所今滋賀郡南滋賀邑あり、又天武天皇戦後大友を大伴に改むと云ふ。以郷隸滋賀郡世称滋賀黒主園城寺在中故黒主為地主黒主以善和歌著称(古今和歌集序)

為郡大領叙 八位上、貞観中以園城寺為延暦寺別院、黒主為神祠別当、延喜中法皇屢幸石山寺、国司患其勞民、法皇聞之、及復幸課他国奉邑以充其費、国司大懼、乃造亭於打出浜植以菊花独令黒主侍還幸、法皇怪問黒主献和歌曰、
佐々羅美麻毛奈久岐之乎阿良布米利奈岐佐幾久又波岐美斗麻礼冬加
法皇大悦賜物而還 仁和昌泰大嘗会黒主献風俗歌
天智天皇 皇子大友 与多王 都堵牟麻呂

村王弥須良 清村早世

とある。資料の真偽の程は確かめ難いが、黒主は園城寺(三井寺)の領主であり、志賀の土地に住していたことは確かである。そして歌も巧みで法皇も献上歌で大悦、黒主の歌才

も群を抜いていたことであろう。

私の土地に「大伴」を名乗る家が、現在二十三に達する。皆姻戚関係であるが、その系図によると、前記の系図より四十九代に亘るとある。しかしこれの真偽は全くはつきりしない。むしろ黒主を村の守り神として祀り、その姓に肖ったものだと考えられる。

以上のように黒主とは大伴だんな人であつたかがわかりこれからの研究資料にしていきたいと思う。

×

×

×

ついでながら、大伴神社より南へ二百米程比叡山下ライプウエーの天津よりの登り口のところに福王子神社という社がある。祭神は紀貫之と聞いている。京都の宇多野の方にも確か福王子神社があつたと記憶している。もちろん祭神も同じらしい。ところで、隣り合つた社に奇しくも古今集の代表的な歌人を祀っているわけである。黒主の方はほぼ確証があるが、貫之と志賀にどんな関係があるのだろうか。それに加えるに、比叡山の中腹にも貫之の墓地がある。こんな証拠よりして何か志賀の土地とも関連がありそうである。もっと資料がほしいと思う。

×

×

×

その昔、大宮人が志賀の山越えをして、琵琶湖の方へ遊びに来たことであろう。はなやかな粧いで往来する女性と、咲き誇る山桜の美しさは一幅の山水画の感があつたことだろうと想像される。

志賀の山越に女の多くあへりけるに詠みて遣しける

あづさ弓はるの山辺をこえ来れば道もさりあへず花ぞ散りける（古今集） 貫之

道もせに花のしらゆき降りとちて冬にぞかへる志賀の山こえ（夫木集） 慈鎮

散り初むるはなの初雪ふりぬれば踏み分けたき志賀の山越（夫木集） 西行

都人そことも云はず打ちむれて花にやどかる志賀の山越（恰野集） 後鳥羽院

往来する人の様、風流をたのしんだ人の様を考えると、現在志賀の山越えはどんなになつてのことだろう。

今志賀の山越には桜とて見られぬもの寂しい山道となつてしまつてゐる。通る人もなく仙人だけが知るだけといつても過言ではないくらいで、千古のはなやかさなど見るべくもなくなつてゐる。その上、峠の上を比叡山下

「あこやけ」

小春日和の爽涼の候となりました。やがて北山時雨で木々は紅葉に染めなされ、京独特の風趣を呈することでしょう。

さて私は去る三月末、永年勤務しておりました立命館大学を退職いたしました。思えば職を奉じて三十有余年、何らなすなく過ごした日々をかえりみて、心恥かしく思っている次第です。しかるに去る六月六日、卒業生諸君並びに在校生の皆様には魚可楼にて、盛大なる記念送別の宴を催して下さいましたことを深く御礼申し上げます。かつ日本文学教授有志並びに卒業生有志の方々より、記念品目録をいただき、何か欲しいものを所望せよとの有難き御言葉を頂き、恐縮いたしました。

かつて若かりし日、私の干支にあたる馬にちなんで、駿馬の床かざりが欲しいなど思つて見たことがありましたので、このたびのお言葉にあまえて、馬の置物をお願いしておいたところ、九月九日和田教授・森本助手同道、池

田勇八氏の美事な銅の馬の彫刻「嘶」をお贈り下さいました。このような逸品をいただき、私の終生の友といたしまして、末永く愛玩出来ることをよろこんでおります。池田勇八という人は有名な人で東京美術学校出身の彫刻家。大正九年帝展審査員、作品は馬・山羊などの動物類が多く、動物専門の作家として知られてゐる人です。明治十九年生れで現在も藤沢あたりに住んでゐると思ひます。ここに御芳志のほどありがたくお受け致し、厚く御礼申し上げます。

還暦の際に有志諸君から祝意を表したいとの申出がありました。その際極力断りつづけました。しかし最後に日本文学専攻独自の発表雑誌を持ちたいと在校生諸君が骨を折つた事を想ひ起しまして、私の還暦に名を借りてかねての諸君の希望が実現出来るならということに致しました。そして出来たのが「論究日本文学」です。その節私も油絵の肖像画をいただき、また盛大なる祝宴もひらいていただきました。深く感謝しております。「論究日本文学」はこのようにして出来現在にいたつてゐるのです。

このたび退職にあたり「論究日本文学編集委員会」から略歴など徴されたので、誌上を借りてここに有志諸君の御厚情を謝し、今後の御奮闘を祈ります。

私は元来山梨の生れ、妻も同郷です。長男は目下東京に住み、親戚の多くは関東におります。けれども京都は私の第二の故郷であり、永年住み馴れた京都を私の最後の地をきめております。幸に次男は立命の経済学部で職を奉じております。私も現在関西学院大学、池の坊短大などの講師を勤めておりまして、ただ今ところ、健康状態はわるくありません。駿馬の夢は消えたとしても、何かまとまつた仕事をしたいと、日夜駄馬に鞭うつております。御寸暇お立ちより下さいませれば、この上もなき幸と、よろこんでお待ち申上げております。

昭和三十四年十月

清水 泰

立命館大学日本文学会会員各位